新学期行進曲

海野十三

第一景　勉強組合

△騒然たる中学校の教室の音響――「やい亀井」「なんだ松岡」「随分黒いぞ」「黒くておかしいかい。やい白ん坊」「なんだ黒ん坊」などの早い会話のやりとりを遠く聞かせる。それに交って、床をドタ靴でふみならしながら、愛国行進曲を口笛で吹いているのが聞える。

△始業のサイレンの音――更に遠くに聞える。

△扉をドーンとついて、また新たに教室へとび

こんで来る生徒の靴音、鞄を投げつける音、それに交って「あれ、おれの席はどこだ」「おい吉田吉田こっちだこっちだ」「やあ変だなあ、こんなところに僕の机が……」などと急口調（きゅうくちょう）の話声。

生徒蝦原（えびはら）　あっ先生だ……。

△扉がガチャリとしまる音

一同、たちまちしーんと静粛（せいしゅく）になる（間（ま））

先生　えっへん

先生　（出席簿をバタバタ開けたりしめたりしながら）ああア皆さん。このクラスは相変らず元気者ぞろい

じゃのう。夏休み中は、さぞやさぞ楽しいことであったろう。先生などは夏休み中、すこし気にかかることがあって（といってはっと気がつき）ああむにゃむにゃ、えっへん。——ああア、そこで新学期の始めに一つ、クラス全体に苦言（くげん）を呈（てい）しておく。

△生徒大勢がガヤガヤと不安の気配（けはい）

先生　ああア、どうじゃ、このクラスはなかなか元気者揃いであり、また中々無邪気者揃（むじゃきものぞろ）いであって、先生はよいクラスじゃと思っとるが、ああア、一つ感心せんことがある。それは——それはじゃ、近来宿題をやらせても大分出来が悪いし、試験をやっても、

これまた答案の出来が悪い。どうもこれは困った傾向じゃ。

生徒一同。しーんとしている（間）

先生　（励声一番）これ思うに、このクラスの皆が戦争ごっこに夢中になっていて、勉強の方をとんと怠っているからじゃと思う。戦争ごっこ、必ずしも悪くはない。しかし勉強を第一とせんけりゃならん。お前たちはまずなによりも生徒であるのじゃからな。出征兵士は敵兵をたおすのが任務であるごとく、生徒は勉強するのが任務じゃ。お前たち第二国民が今勉強を怠って居ると次の時代に於いてこれが

どんな風に響くと思うか。次の時代に戦争が起ったときにゃ、不勉強のおかげで敵軍を撃破するに足る優秀な戦車が出来なかったり、また優秀な飛行機が作れなかったりして、べそをかかんけりゃならん。つまり学問の力で外国に負けるぞ。まことに由々（ゆゆ）しき一大事（いちだいじ）ではないか。

　廊下にあわただしき靴音、扉（ドア）ひらく音。

給仕　（息をはずませながら）あ、大山先生。お宅から電話です。すぐお帰り下さい、ですって。

先生　（おどろき）ええっ、な、な、なにごとか起ったというのか。

給仕　先生のお宅で赤ちゃんが生れそうですって。

生徒一同、うわーっと喚声をあげ机を叩き床を踏みならす。

先生　えっ。とうとう始まったか。それはまことに由々しき一大事。

生徒一同うわーっ。

先生　これこれ（と生徒を制しながら）皆よろこんでくれ、先生のところでは十五年ぶりに、ついに赤ん坊が生れるのだ。神様が赤ん坊をさずけたもうたのだ。戦争で、尊い兵士は死ぬ、国力は減る、それを補うのは赤ん坊の誕生だ、笑い事ではない。先生

の家には留守番がないのだ。ちょっといってくる、静粛（せいしゅく）にしているんだぞ。

先生の靴音去る、扉の音。

級長　まことに由々しき一大事か。

こんどは誰も笑うものがない（間）。

級長　ねえ皆。新学期早々（そうそう）、これはまことに由々しき一大事だ。僕たちは、たしかに生徒たる本分を忘れていたようだね。

生徒、賛否（さんぴ）両論ガヤガヤ。

級長　どうだ皆、こうしようじゃないか。この由々しき一大事を突破するために、わがクラスは勉強組合

というのを作ろうじゃないか。

　生徒ガヤガヤ。

生徒　勉強組合ってなんだ。

級長　勉強組合というのはね、放課後、皆で学校に残るんだ。

生徒　残って、何をするんだ。

級長　残って、皆でその日習ったところを復習するんだ。復習するだけじゃない。委員をきめて、模擬(もぎ)試験をやるんだ。そして出来ない奴があったら、皆して分るところまで教えっこするんだ。

生徒　放課後は運動したいね。体力をつけることも、

第二国民には大事なことなんだぜ。

生徒大勢「そうだそうだ」

級長　じゃ夕飯（ゆうはん）［＃「夕飯（ゆうはん）」は底本では「夕食（ゆうはん）」］がすんでから、誰かの家へ集ってやることにしよう。僕の家の会社に広い会議室があるから、お父さんにいってあそこを貸してもらおうや。

生徒　うまくゆくかなあ。

級長　きっとうまくゆくよ。

生徒　でも蝦原（えびはら）のような出来ないやつは、いくら教えたって出来やしないよ。

級長　なあにきっと、うまくゆかせるよ。僕にゃ、ま

だとって置きのいい手があるんだ。この手でやれば、
どんなに出来ないやつだって、出来るようになるぜ。
つまりこういう風に……。

場面一転する感じの出る音楽。

生徒ガヤガヤ。

遠く自動車の警笛(けいてき)、口笛を吹いている行人(こうじん)、など

街の騒音(そうおん)。

級長　外が騒々しいね。暑いけれど、窓を閉めよう。

窓を閉る音。

生徒　あっ、出来た。これでいいんだろう。Ｘは５で
Ｙは３、Ｚは12さ。

級長　ええ、ちょっとかしてごらん、Xは5、Yは3で、Z……12か。よし答は合っている。ほら、キャラメル一個だ。

生徒　（よろこんで）ああサンキュウ、これでキャラメルは五ツ目だ。（と、口の中へ放りこんでピチャピチャなめる）やあ蝦原が泣いてらあ、蝦原、出来ないのか。

蝦原　（くすんと鼻をすすり）なんべんやっても出来ねえ。

生徒　ちぇっ、ちょっと見せてごらんよ。あれ、まだ二番じゃないか。

蝦原　ああ、そうだよ。僕なんか、まだキャラメルを一個しか喰べていないんだ。

生徒　そりゃ仕方ないよ。だってまだ一題しきゃ出来てないんだもの。今日代数（だいすう）の時間、君は飛行機の絵ばかり書いていたじゃないか、あれじゃ駄目だよ。

蝦原　なにが駄目だい。

　級長の足音。

級長　ああっ、君たち喧嘩なんかしちゃいけないよ。

生徒　ねえ蝦原（えびはら）はやっぱり出来ないんだよ。まだ二番の問題で、ひっかかっているんだ。君教えてやり給え。

級長　よし。蝦原、どこまでやったんだ、あっ、これじゃ駄目なんだ。君は公式を忘れているんだ。だから出来ないんだ。さっき教えてやったじゃないか。Ａの二乗（にじょう）、マイナス、Ｂの二乗を因数分解（いんすうぶんかい）すると、さあどうなる？

蝦原　えーとＡの二乗、マイナス、Ｂの二乗はえーとえーとえーえー。

級長　早く思いだし給え、おい蝦原、キャラメルを喰べたかないかい、ほらこんなにいい色をしているよ。

蝦原　喰べたいよ。それを喰べると、公式を思いだすかも知れない。

級長　駄目駄目思い出さなきゃ絶対にやらないよ。あっそうだ、君に頑張ってもらうため、おまけを一つつけるよ。ほらチョコレート一つおまけだ、チョコレート喰べたかないかい。

蝦原　喰べたいよ喰べたいよ、口の中にツバがたまってきたよ。ああたまんない、目の毒だ。目をつぶっちゃおう。Ａの二乗、マイナス、Ｂの二乗はえーーと、えーと、Ａマイナスの二乗……じゃないや、ＡマイナスＢとそれからキャラメル、いやちがった。ええうーんあっ、そうだ、わかったわかった、ＡマイナスＢとＡプラスＢの積だ！

級長　蝦原えらい！　それでいいんだ。こんどはもう忘れちゃ駄目だよ、ほらキャラメルとチョコレートをやるよ。

蝦原　どうもありがとう（と早速ホオばり、口をもごもごさせながら）ああうまい、ホオペタがおっこちそうだ。

級長　公式を思いだしたら、問題を早く解いてしまいなよ。ほらここだ。ＡマイナスＢがこっちにもあるから、ＡマイナスＢでくくれるじゃないか。

蝦原　ああ本当だ。ＡマイナスＢでくくってあとは、えーと３Ａプラス２Ｂと、ＡプラスＢか、ねえ、こ

れから先、どうするの。

級長　いやんなっちゃうね。それで出来たんだよ、それが答なんだよ。

蝦原　えっこれが答かい、なあんだ。訳はねえや。うふふふ、代数ってなかなか面白いもんだねえ。

級長　あははは、蝦原の奴代数が面白いっていったぞ。あははは。

生徒　代数よりキャラメルの方がうまいだろう。

級長　えっへん、これは誠に由々しき一大事じゃ、勉強組合ばんざいだ。

生徒大勢、あはははと朗（ほが）らかに笑う。

街の遠くから、出征兵士（しゅっせいへいし）を送る「天に代（かわ）りて」の合唱近づき来る。

……──幕──……

第二景　夢の中の模擬試験（もぎしけん）

音楽。夢の曲（トロイメライの如く）

受験生青木　はて見なれない所だなあ。どうして僕は今ごろ、こんな野原を歩いているんだろうねえ……

おや、変だなあ。とつぜん目の前に、立て看板が出たよ。なんだ？　模擬試験場と書いてある。模擬試験なら、受けると自信がつくから受けてもいいんだが、どこにあるんだろうね。

女教師　もしもし青木さんここへいらっしゃい。

青木　はあ。……いつの間に先生はお出でになったんですか。ああ机も腰かけもありますね。ああ、わかりました。これが模擬試験場なんですね。

女教　さあ皆さん、揃いましたから問題を出します、ようございますか。或るところに卵売りのお婆さんがありましてねえ、若干個籠に入れて、町へ売りに

行きましたの。最初の家では、卵の半数と一個の半分とを売りました。次の家では、残りの卵の半数と一個の半分とを売りました。それから最後の家で、残りの卵の半数と、一個の半分とを売って、それで全部売りつくしました。最初籠に入れてあった卵は何個だったでしょうか。但し、この卵売は卵を実際半分に割ったりしないで、うまく三軒の家に完全な卵を売りました。これを代数で解いて下さい。

青木　先生もう一度いって下さい。

女教　はい、もう一度申します……卵売りのお婆さんが卵を若干個、籠に入れて、町へ売りに行きました。

最初の家では卵の半数と一個の半分とを売り、次の家では残りの卵の半数と一個の半分とを売って、最後の家で、残りの卵の半数と、一個の半分を売ってそれで全部売りつくしました。最初、籠にあった卵は何個だったでしょうか。但し卵は、いつも割らずに売りました。これを代数で解いてください。

青木　やあ面白いなあ。まるでナゾナゾの問題だ。これを代数で解けとは、ますます面白い。まず卵の総数をＸと置いて、それから……。

女受験生房子　はい先生、できました。

青木　あれっ、もう出来た子がいるよ。

女教　はい房子（ふさこ）さん、出来たんですね。どういう式を立てたか、そこで読みあげてごらんなさい。

房子　はい。まず最初の家で売った卵の数は、Ｘを二で割って、そこへプラス二分の一個です。これをまとめますと、分母が二、分子がＸプラス一となります。仮りにこれをＡと置きます。

女教　Ａとおくのですか、それから……。

房子　さて、次の家で売った卵の数は残りの卵の半数ですから、ＸマイナスＡを二で割ったものと、そこへ二分の一個を足したものです。このうちＡは前に出ていますから、それを代入しまして、結局第二番

目の家で売った数は分母が四、分子がＸプラス一となります。これをＢと置きます。
女教　それまではよろしい、それから……。
房子　最後の家で売った卵の数は、ＸマイナスＡマイナスＢ、これを二で割ったものと、そこへ二分の一個を足したものですから、これは分母が八、分子がＸプラス一となります。これをＣと置きます。
女教　それで答は？
房子　Ｘイコール、ＡプラスＢプラスＣですからこれを解いてＸは七個となります。
女教　御名算です。はじめ籠の中にあった卵は七個で

した。

△音響、パチパチと大勢の拍手

青木　どうも驚いた。子供のくせに随分出来るんだなあ、僕はもっと代数を勉強しなきゃ駄目だ。あーあー教だんに別の先生が現われたぞ、今度はひげのお爺さん先生だ。

老教　これこれお前たち、わしの見るところでは、お前たちはどうも教科書に征服されたり、試験に呑まれたりしていてどうもいかんね。お前たちはもっとゆっくりした気持で勉強せんけりゃいかん。さあそこで奇抜な問題を出すぞ。この答案がうまく出来れ

ば試験パスじゃ。これは立体幾何学の問題じゃ、えーと、「幾何学をもって幽霊の存在を証明せよ」どうだ分るか、もう一度いう「幾何学をもって幽霊の存在を証明せよ」問題はそれだけじゃ。

△音響、大勢ががやがや。

老教　これ、しずまれ。おい青木、お前一つ解いてみろ。さあ立て、男らしく立て。

青木　はあ、幽霊を幾何で証明しろなんて、そんな変てこな問題は解けません。

老教　なんでもいいから立てというんだ。立てば、わしがここからそっと電波を出してお前に教えてやる。

青木　そうですか、教えてくれますか、はい立ちました。先ず平面の世界を考えます。おやおや、これはおかしい。ひとりでに僕の口がすらすらとしゃべりださあ。

老教　まず平面の世界を考えます。それからどうするんだ。先をしゃべれ。

青木　はい先生、平面の世界では縦横（じゅうおう）の長さはありますが、高さというものを知りません。僕達は立体の世界に住んでいるので、縦横、高さ、皆分っています。平面の世界の一例は静かな水面です。水の表面だけの世界を考えて下さい。そして、そこに住ん

でいる生物をも考えて下さい。

老教　よしよし、それから。

青木　今ここに卵が一個あります。この卵は勿論立体です。その卵を指でつまんで水面に近づけます。そしてそっと放します。さあ、どうなるでしょうか。もちろん、卵は水面を通りぬけて水中に落ちます。さあ、水面の世界の生物には卵が通りぬけるとき、これがどの様（よう）に見えるでしょうか。

老教　はて、どの様に見えるかなあ。平面の世界では、卵に高さがあることは理解できないのじゃから。

青木　まず最初、卵が水面に触れたせつ那（な）を考えま

しょう。水面の世界では、これが一つの点としか見えません、何しろ、水面より高いところも低い所も見えないのですから。

老教　うむ、なるほど。

青木　そのうちに卵はだんだん水につかって落ちます。水面の世界ではこれがどんな風に見えるでしょうか。いきなり目の前に一つの点が現われたと思う中(うち)に、それが見る見るおおきく円形(えんけい)になって広がってゆく。そして遂(つい)にその円形が最大値に達すると、今度は逆に小さくなって行きます。つまり卵が半分以上水につかると胴が細くなるから、水面に接している面積

が小さくなってゆくのです。その中に遂に点になり、そして消え失せます。水面の世界では、卵が落ちていったんだとは知らない。はじめは目の前に点が現われ、それが見る見る大きく拡ってゆくと見る間に今度はどんどん小さくなりはじめ、やがてぱっと消えて了った。何だか訳が分らないものを見た。これこそ予て聞き及んだ幽霊というものだろうと思うでしょう。

老教　ごたごたした云い方じゃが、まあそのへんだろうね。それからどうなる。

青木　それから……今度は我々の立体世界に現われる

幽霊を証明します。我々人間は縦、横、高さの三つしか知らないが、今ここに、もう一つなにか人間の感じないものを備えている超立体世界があったとしましょう。この超立体世界の卵かなんかが、いま突然我々の目の前をとおりぬけたとしたら、それはどんな風に見えるでしょうか。まず、はじめはぽつんと点があらわれますね。それが見る見る膨れてやがてゴム毬のようになり、更にだんだんおおきくなって、ガス・タンク位になりました。と思うと、今度はどんどん縮みはじめて、あれよあれよといううちに、元のゴム毬位の大きさになり、やがてぱっと消

えてしまいました。さあ人間はびっくり仰天（ぎょうてん）、これをなんていうでしょうか「ああ、わしは今そこで幽霊を見たよ」って！

つまり、超立体世界のものが我々の立体世界に交（まじ）わると、それが幽霊に見えるのです。

△幽霊の消える擬音（ぎおん）と怪奇（かいき）音楽よろしくあって……。

第三景　受験生の親達

△遠くでラジオが聞えだす。（浪花節（なにわぶし）か義太夫（ぎだゆう）か）

受験生の母親　えー、頭足類（とうそくるい）はたこに、いいだこに、ま烏賊（いか）、するめ烏賊、やり烏賊の五つ。この頭文字を読むと、たいますや。えー次は、腹足類（ふくそくるい）、これは四つ、あわびにとこぶしに、さざえ、たにし、この頭文字を読むと、あとさた。えー、たいますやに、あとさた……。

△この辺で大きな鼾（いびき）の音が聞えだす。

母親　えー次は斧足類（ふそくるい）。蛤（はまぐり）に蜆（しじみ）に……。

△鼾（いびき）が一段と高くなる。

母親　あーら、なんでしょう。ああ鼾だわ。誰の鼾でしょう。お父さんはまだだし、ねえやは留守だし、するとーすると道夫かしら。あ、道夫だ。受験準備の勉強を怠（おこた）って居睡（いねむり）をするなんて、まあ情けない人ね。

△音響、畳をけってたち、隣室（りんしつ）の襖（ふすま）をあける。

母親　まーあ、道夫、なぜ居睡なんかするんです。そんなことじゃあ、高等学校の入学試験が受かりませんよ。さあ起きなさい。元気を出して。

道夫　ああっ、ああーっ。今日は睡（ねむ）いなあ、お母さん、

今日は体操の時間にうんと駈足（かけあし）をしたんで、睡いんですよ。

母親　あーら、そうかい。困ったね。まだやらなければならない問題がうんとあるんだよ。一晩に七十五題はやるようにしないと、入学試験までにとても受験書を皆すませやしないわ。元気を出してよ。お母さんは拝（おが）むから。

道夫　だって睡いんですよ。脳髄がまるでよそから借りてきたみたいで、ちっとも働かないんです。

母親　まあ、いけないわねえ。じゃ仕方がない。頭を悪くしちゃだめだから、今日はもうお寝（やす）みなさい。

ぐーっと睡るといいわ。睡眠剤（すいみんざい）をのんでやすむのよ。
いいかい。

道夫　（いよいよ睡そうに）えーえ、あーあー、

△蒲団（ふとん）を出す音。母親は襖をしめて、もとの茶の間にかえってどさりと座る。

母親　本当に道夫に代ってやりたいわねえ、あたしなんかちっとも睡かないわ……さあ、もっと先を勉強しておきましょう。道夫がどの位勉強したかを験（ため）すのは、あたしが道夫以上に、何でも覚えてなくちゃいけないんだわ、一人子（ひとりっこ）の母親って、誰でもこんなにやきもきするものかしら。（気分をかえて）えー

斧足類は蛤に蜆に牡蠣、あさり、あげまき、帆立貝、赤貝、ばか貝。

△音響、格子ががらがらとあく。（父親の帰宅）

父親　なんだ。赤貝にばか貝か大変な御馳走だな。しかし、ばか貝は止してくれ。青柳という粋な名があるじゃないか。

母親　お帰りなさいまし。あなた、御飯はもうお済みになりましたの。

父親　どういたしまして。これから洋服をぬいで、その長火鉢の前で御馳走になるてえ順序でござんす。

母親　まあ……。

△洋服をぬぎ、洋服かけがちゃつく。同時に膳部（ぜんぶ）の仕度の音、薬鑵（やかん）、飯櫃（おひつ）の音。

母親　さあ、どうぞ。

父親　よお、どっこいしょ、と……ああ道夫はどうした。

母親　あのう、たいへん睡くて、脳髄がお豆腐（とうふ）のようになりそうだと、こう申しますので、お先に寝かしてやりました。

父親　おおそうかい。道夫も此頃（このごろ）受験準備で、可哀想（かあいそう）な位つかれているね。すぐ寝かしてやったとは、お前にしちゃ大出来（おおでき）だ。

母親　さあ、どうぞ。

父親　ああ。山盛（やまもり）よそってくれ。ああ腹が減った。

△音響、茶碗を盆（ぼん）にのせる音。つづいて飯櫃をひらく音。

父親　おや、赤貝に青柳が出ていないぜ、おい、どうしたんだ。

母親　はい。大山盛です。

△父親、飯を頬（ほお）ばる。

父親　赤貝に、青柳に……。

母親　あーら、いやですわ。あれはあたしが動物学の暗誦（あんしょう）をしていたんですわ。

父親　（飯を頬張りながら）動物学だって。

母親　ええ。つまり、斧足類の動物と申しますと、蛤だの、蜆だの、あさりだの、それから赤貝やばか貝でございますの。

父親　なあんだ。御馳走じゃなかったのかい。それは一向（いっこう）つまらんねえ。（気をかえて）しかし、なぜお前が赤貝やばか貝を暗記する必要があるんだ。

母親　あなたア！　あ、あ、あなたア！

父親　ななな、なあんだ。急に、か、金切（かなき）り声（ごえ）など出しやがって。

母親　失礼いたしました。ではございますが、あなた

は道夫に対し、たいへん冷淡（れいたん）でいらっしゃいます。道夫が、あの通り受験準備のため、好きなレコードをきくことさえよしていますのに、あなたは道夫の入学試験のことを、ちっとも心配しておやりにならないんですもの。

父親　冗談いうな。俺はどんなにか心配を――。

母親　まあ、あたくしの申すことをお聞きあそばせ。あたくしなんか、道夫と一緒になって受験勉強をしているのでございますよ。頭足（とうそく）類、腹足（ふくそく）類、斧足（ふそく）類などを暗記しておりますのも、道夫以上に母親が知っていれば、道夫が発奮（はっぷん）すると思うからでござい

ますよ。それから、あたくしは、新聞の広告面を毎日隅から隅まで目をとおしまして、なにか新刊で優秀な受験準備書がありますと、すぐ本屋へとんで行って買ってまいります。そしてまずあたくしが読んでみまして、他の受験書に出ていない問題を選りわけまして、道夫に毎日毎日やらせているのでございますよ。あたくしは、いやしくもわが国において印刷になった練習問題なら、一度は必ず道夫にやらせておかなければ、枕を高くして寝られないのでございます。そのお陰で道夫は入学試験のとき、どんなに楽だか知れません。それほどあたくしが……。

それなのに――。

父親　おい御飯だ、お代りだ。

茶碗と飯櫃(おひつ)の音。

母親　あなたはあまりに冷淡(れいたん)です。

父親　ばかをいうな、お前が熱心であることは認めるが、そんなやり方は感心できない。

母親　とんだことを仰言(おっしゃ)います。

父親　なあに、本当のことをいっているんだ。無茶苦茶に暗記をしたり、それから、また無茶苦茶に受験書を買いあつめたりするのは愚(ぐ)の骨頂(こっちょう)だよ。そんな詰めこみ主義は役にたたんばかりか、むしろ反対

に害がある。常識上重要な原理さえしっかり覚えていれば、いいんだよ。受験書なんか、一冊で沢山だ。この間も勘定したら、お前は漢文の受験参考書だけでも二十七冊も集めていやがった。まるで蒐集マニアだ。

母親　蒐集マニアだなんて、まあひどい。あなたの原理主義なんかに従っていると、高等学校のあのむずかしい問題なんか、一題だって出来やしませんわ。

父親　お前がそんなに勉強しているのならちょっと尋ねるが、颱風が近づいてね、いいかい、真東から風が吹いているんだ。しからば颱風の中心はどの方角

にあるか。

母親　颱風の中心ですって、そんなこと試験問題集に出ていませんわ。

父親　それ見ろ、知らないじゃないか。これからの試験にこういう常識上知っておかなければならぬ問題が出るんだぞ。参考のため教えてやろう。いいかね、真東から風が吹いていれば、颱風の中心は南南西よりちょっと西よりの方角にあるんだ。大ざっぱにいうと、風を背にして立って左手を斜前（ななめまえ）へ出す。それが大体、颱風の中心を指（さ）す。どんなものだい。

母親　へへん、さよでございますか、じゃあこんどは

あたくしが伺(うかが)いますわ。東洋歴史で、中国で辮髪令(べんぱつれい)が出たのは何年でございますの。

父親　知らん。

母親　あーら、御存知ありませんの、あれは西暦で一六四五年でございますわよ。ほほほほ、じゃあ赤壁(せきへき)の戦(たたかい)は何年でございますの。

父親　知らんよ。

母親　えへん、西暦二〇八年。ではネルチンスクの条約は。

父親　一々覚(おぼ)えとらん、そんなものは年代表(ねんだいひょう)をめくればすぐ分る。

母親　でも御存知ないのでは、入学試験に合格しませんわ。

父親　ばか、そんな無駄な暗記は意味がないよ。辮髪令の年号なんか何の役に立つんだ。

母親　だからあなたは冷淡だと申すのですわ。万一辮髪令の年号が試験に出て、道夫が答えられなかったその時は、落第でございますよ。一人息子を落第させるなんて、あなたは鬼(おに)か蛇(じゃ)か、実になんという……。

　隣室の襖ががらりと開く（道夫起き出る）

道夫　お父さんもお母さんも、やかましくって、僕ね

むくなくなっちゃった。久し振りに、レコードでもかけようかな。

母親　これ道夫。

父親　なあに、かけさせておやりよ。お父さんはお前を慰安(いあん)してやろうと思って、そこにレコードを買ってきたよ。

母親　まあ、あなた。一体どんなレコードを買っていらしったの。

　道夫の勉強の邪魔を……。

父親　まあ、そう心配しなさんな。おれは道夫を喜(よろこ)ばせ、且(か)つ愉快に勉強させてやろうと思って、これ

を買って来たんだ。これ一名親心（いちめいおやごころ）のレコードという。道夫、さあ、かけてごらん。「算術（さんじゅつ）の歌」というラベルの方だよ。

道夫　はい「算術の歌」の方ですね。

△レコード「算術の歌」賑（にぎや）かに廻（まわ）る。

底本：「海野十三全集　第7巻　地球要塞」三一書房
　　1990（平成2）年4月30日第1版第1刷発行
底本の親本：「十八時の音楽浴」ラヂオ科学社
　　1939（昭和14）年5月5日発行
初出：「家庭コント　新学期行進曲」JOAKラジオドラマ台本
　　1938（昭和13）年9月30日放送
※「西暦」は底本通りです。
入力：土屋隆
校正：田中哲郎
2005年4月1日作成

青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。